

令和 2 年 6 月 26 日現在

機関番号：34605

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2019

課題番号：16K01687

研究課題名（和文）負傷競技者における自己と他者との相互作用がスポーツ傷害受容に及ぼす影響過程の検討

研究課題名（英文）A study of the influence process of self-other interaction on athletic injury psychological acceptance of injured athletes

研究代表者

辰巳 智則（Tatsumi, Tomonori）

畿央大学・教育学部・教授

研究者番号：30441447

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、負傷競技者のスポーツ傷害受容を促す心理支援のあり方を当事者による情動調整行動と重要な他者によるソーシャル・サポートとの関連を明らかにすることにより検討することであった。その結果、実行されたソーシャル・サポートに対する認知度の違いにより、負傷競技者が行使している情動調整行動の質が異なることが明らかとなった。また、負傷後の時期の質、負傷選手が行使している情動調整行動の質に応じて心理支援の質を変えていくことが重要であることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

この方面の先行研究では、重要な他者から実行されたソーシャル・サポートが負傷競技者の陰性情動の低減や傷害受容（負傷の現実を受け容れることができる心性）の促進に寄与することを明らかにしてきたが、その効果をもたらすメカニズムについては十分な検討がなされてこなかった。

そこで本研究では、ソーシャル・サポートが受容にもたらす恩恵の間に主体による情動調整行動が媒介することを明らかにし、その具体的なメカニズムを示した。また、ソーシャル・サポートと情動調整及び受容との関連を時系列的に検討することで、時期の質や情動調整の質に応じた支援の質を考慮することの重要性が示唆され、支援への新たな仮説が見出された。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to investigate the psychological support for promoting athletic injury psychological acceptance of injured athletes by clarifying the relationships between emotion regulation behaviors of injured athletes and social support from significant others. As a result, it was clarified that the quality of emotion regulation behaviors used by the injured athletes was different depending on the degree of recognition of the enacted social support. It was also suggested that it is important to change the quality of psychological support according to the quality of the post-injury period and the quality of emotion regulation behaviors used by the injured athletes.

研究分野：スポーツ心理学

キーワード：スポーツ傷害受容 情動調整行動 ソーシャル・サポート 時期的要因 心理支援 アスレティック・リハビリテーション

## 様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

1) 負傷競技者への心理介入に係る理論モデルを概観すると、精神分析学説に基づく段階モデルとストレス心理学説に基づく認知的評価モデルに大別される(Tatsumi, Fukumoto, & Bai, 2015)。段階モデルは、スポーツ競技者の負傷後の心理・情緒的反応に自然(じねん)的段階を想定し、多くの研究はその最終に「受容」を位置づけている(e.g., Gordon, 1986)。係る代表的な介入法である悲嘆療法では、負傷競技者が負傷による陰性の情動(悲嘆)を滞りなく表出させることに力点を置き、この表出が受容を促し、リハビリテーションへの専心性を高めるという視点に立っている(e.g., McDonald & Hardy, 1990)。他方、認知的評価モデルは、負傷に対する認知(捉え方)が情緒や行動レベルの反応を規定するという視点に立ち(e.g., Brewer, 1994)、係る介入法である認知療法では、負傷により不適応的な状態に陥っている負傷競技者の認知の歪みを修正し、適応的な行動を学習することに力点を置いている。なお90年代には、負傷競技者の反応を予測する精度の点から、両モデルの取捨に関わる論争が生じたが、本邦ではリハビリテーション心理学における障害受容(Wright, 1960)の視点が援用され(上向・竹之内, 1997)、独自の展開をみてきた。しかし、Wright(1960)をはじめとする障害受容の考え方は、競技復帰が可能な範囲の器質的・機能的障害を負った競技者に固有の心性を捉えていないという指摘もあり、スポーツ傷害の文脈に則した受容理論の構築が課題とされてきた。

2) 上記を受け、辰巳・中込(1999)は「スポーツ傷害の受容」を定義づけ、その予測的観点を抽出した。また、スポーツ傷害に特化したスポーツ傷害受容尺度(AIPA-S)を開発し、受容とリハビリテーション専心性との関連を認めてきた(Tatsumi, 2013)。加えて、このAIPA-Sを用いた研究(Tatsumi, 2014)では、競技復帰後の競技者の適応状態にリハビリテーション期の受容の程度が影響している点を明らかにしてきた。この結果はすなわち、受容を心理介入の方向目標に位置づけることが妥当である点を示唆するものであった。そこで、本研究の礎となるTatsumi & Takenouchi(2014)による研究では、受容を促す先行因(心理社会的回復要因)を同定し、双方からなる因果プロセスを「スポーツ傷害受容の心理プロセス」と命名した。

3) なお、Tatsumi & Takenouchi(2014)による研究では、受容の先行因からは特に「情緒的安定性」と「時間的展望(見通し)」からの影響が強く認められた。すなわち、この結果からは、負傷競技者が自らの陰性情動に対して行使している情動調整行動と第三者から付与されるソーシャル・サポートがスポーツ傷害受容の心理プロセスを調節する変数として機能していることが仮定されてくる。ところで、傷病宣告後の反応を調節する変数として、自己の情動調整の機能を取り上げた先駆的研究に乳がん患者を対象としたもの(Stanton, Danoff-Burg, Cameron, Bishop, Collins, Kirk, Sworowski, & Twillman, 2000; Iwamitsu, Shimoda, Abe, Tani, Kodama, & Okawa, 2003)がある。これらの研究は、確定診断後の心理的苦痛の感じ方や情緒の混乱度を調節する情動調整を「感情抑制」と「感情表出」の視点から検討している。情動調整の個人差に着目する視点は、悲嘆療法の考えを背景とする本研究にも十分に適用可能と考えられる。他方、Cohen, Kessler, & Gordon(1995)は、ライフイベントと健康問題の間にある調節変数として、第三者から実行されるソーシャル・サポートを考慮することが重要であることを指摘してきた。Kennedy-Moore & Watson(2001)はまた、心理的苦痛の表出がもたらす恩恵の前提として、対人関係のプロセスを重視している。以上からは、負傷競技者が行使している情動調整と他者から実行されるソーシャル・サポートを調節変数とし、受容を方向目標とする心理支援のあり方を検討することが有効であると考えられた。

### 2. 研究の目的

以上の背景をふまえ、本研究では、スポーツ傷害受容に影響する環境変数として重要な他者からのソーシャル・サポートを、個人差変数として負傷競技者による情動調整行動を仮定し、これら変数間の関連について、定量的研究(課題1)と定性的研究(課題2)の双方から検討し、心理支援に関する示唆を得ることを目的とした。

### 3. 研究の方法

本研究では、回顧的な質問紙調査(課題1)と半構造化インタビュー調査(課題2)を実施した。なお、本研究で扱うスポーツ傷害は、「一週間以上のスポーツ停止を余儀なくし、アスレティック・リハビリテーション(スポーツ復帰を目的としたリハビリテーション)を要する程度の器質的・機能的障害」とした。課題1の調査対象者(N=180)は、体育・スポーツ系の大学・学部属する者やスポーツ推薦で入学した者等、比較的に高い競技経歴を有する現役の元負傷競技者とした。課題2の調査対象者(N=1)も同様に、スポーツ推薦にて体育系学部へ入学し、比較的に高い競技経歴を有する元負傷競技者とした。なお、課題2については、調査内容の性質をふまえ、競技を引退して数年を経過し、なおかつ負傷経験の回顧が十分に可能な者を対象とした。

### 4. 研究成果

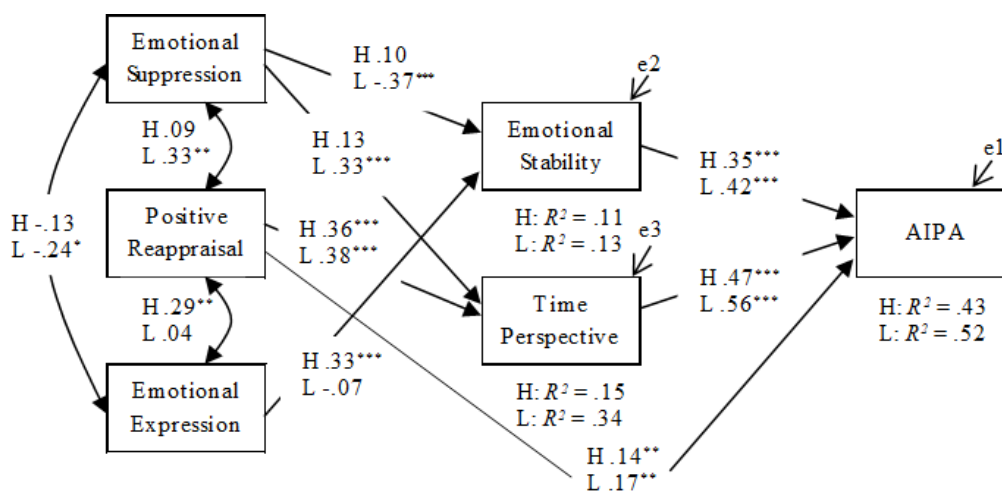
(1) 課題1では、有力な大学運動部に所属する元負傷競技者(N=180)を対象に質問紙調査を行った。スポーツ傷害版ソーシャル・サポート尺度(AISS-S)と情動調整行動尺度(ERB-S)

**Table 1.** Descriptive Statistics, *t*-test Result of the Major Study Variables in High and Low-SS Group

	High SS		Low SS		<i>t</i>	<i>r</i>
	<i>(n = 91)</i>		<i>(n = 89)</i>			
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>		
1. Emotional Suppression	4.59	1.21	4.32	1.29	1.42	.11
2. Positive Reappraisal	3.83	0.77	3.46	0.95	2.92 **	.22
3. Emotional Expression	2.92	0.79	2.67	0.79	2.09 *	.16
4. Emotional Stability	3.50	1.28	3.88	1.55	-1.76 †	.13
5. Time Perspective	5.41	0.93	4.76	1.15	4.21 ***	.30
6. AIPA	4.55	1.00	4.33	1.10	1.40	.11

† *p* < .10. \* *p* < .05. \*\* *p* < .01. \*\*\* *p* < .001.

Note: SS = Social Support.



**Figure 1.** Multiple groups SEM's result concerning a model of causal relationships between ERB and AIPA process ( $\chi^2 = 14.78$ ; *df* = 14; *p* = .39; SRMR = .39; RMSEA = .02; CFI = 1.00; AIC = 70.78). Note: ERB = emotion regulation behavior; AIPA = athletic injury psychological acceptance; H = high-social support; L = low-social support. Numerical values are standardization coefficients

の概念的弁別性を明らかにした後、分析で使用する各尺度についてソーシャル・サポート群間の比較と多母集団同時分析による因果プロセスの検討を行った。これらの結果を Table 1 及び Figure 1 にそれぞれ示した。Table 1 に示した通り、実行サポートに対する認知度が高い負傷競技者 (H 群) は低い負傷競技者 (L 群) に比して、情動表出や肯定的再解釈に関する情動調整行動を行使していた。また Figure 1 に示した通り、①実行サポートに対する認知度が高い負傷競技者には、情動表出の機能が働き、情緒的安定性の回復を介し、スポーツ傷害受容を促進させていること (正の間接効果) が示唆され、②実行サポートに対する認知度が低い負傷競技者には、情動表出を抑制する機能が働き、情緒的安定性の回復を阻み、スポーツ傷害受容を阻害させている (負の間接効果) 一方、③時間的展望の回復を介し、スポーツ傷害受容を促していること (正の間接効果) も示唆された。他方、④肯定的再解釈に関する情動調整行動は実行サポートによる影響を受けずに機能し、時間的展望の回復を介してスポーツ傷害受容を促進させていること (正の間接効果) や⑤心理社会的回復要因を介さずにスポーツ傷害受容を促していること (正の直接効果) が示唆された。また、⑥実行サポートへの認知度が高い場合には情動表出が、実行サポートへの認知度が低い場合には情動表出の抑制に関する情動調整行動がそれぞれ肯定的再解釈に関する情動調整行動の行使とポジティブに関連し合うことも示唆された。以上のことから、重要な他者によるサポートの実行は、負傷競技者による情動調整行動に影響し、その後のスポーツ傷害受容の心理プロセスに正・負の影響を与えていることが示唆された。以上の研究の詳細は、Tatsumi & Takenouchi (2017) を参照されたい。

(2) 課題 2 では、学生時代に有力な運動部に所属していた元負傷競技者 1 名 (大学 3 年次に腰椎椎間板ヘルニアを発症させ、半年間のアスレティック・リハビリテーションを遂行した後、競技復帰を果たした) を対象に半構造化面接を行い、TEM を用いて負傷から競技復帰に至るプロセスを可視化し、ソーシャル・サポートと情動調整行動及びスポーツ傷害受容の心理プロセス (Tatsumi & Takenouchi, 2014) の構成変数 (心理社会的回復要因及びスポーツ傷害受容) の関

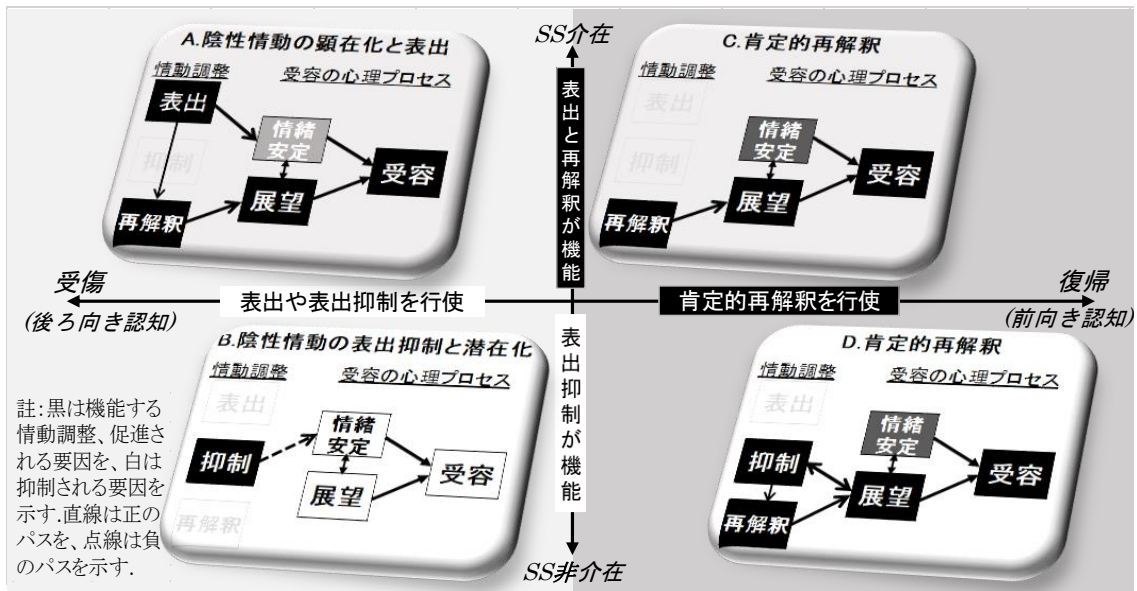


Figure 2. 本研究のまとめ

連を縦断的に検討した。この結果を Figure 2 に示した。分析の結果、課題 1 の研究（上記 1）で示された全ての反応パターンと整合していることを追認した。ただし他方では、負傷競技者による陰性情動の表出に関する情動調整行動が重要な他者によるソーシャル・サポートの実行を引き出していたり、さらにソーシャル・サポートがこの表出を促し、肯定的再解釈に関する情動調整行動の行使をもたらすというソーシャル・サポートと情動調整行動の双方向の因果的作用も認められた。また、ソーシャル・サポートの有無により、受容に影響する情動調整行動に相違がみられただけでなく、負傷—復帰間における時期の違いにより受容に影響する情動調整行動が異なることも明らかとなり、受容以前の局面では情緒的安定性の回復を意図した情緒的支援を、受容以降は競技復帰を意図した見通し支援といったように、時期の質と情動調整行動の質を加味した支援が有効であることが示唆された。以上は、Tatsumi & Takenouchi (2019) にて報告され、研究の詳細については、辰巳 (2019) を参照されたい。

<引用文献>

- ① Brewer, B. W. (1994). Review and critique of models of psychological adjustment to athletic injury. *Journal of Applied Sport Psychology*, 6, 87-100.
- ② Cohen, S., Kessler, R. C., & Gordon, L. U. (1995). Strategies for measuring stress in psychiatric and physical disorders. In S. Cohen, R. C. Kessler, & L. U. Gordon (Eds.), *Measuring stress* (pp. 3-28). New York: Oxford University Press.
- ③ Gordon, S. (1986). Sport psychology and the injured athlete. *Science Periodical Research and Technology in Sport*, 1, 1-10.
- ④ Iwamitsu, Y., Shimoda, K., Abe, H., Tani, T., Kodama, M., & Okawa, M. (2003). Differences in emotional distress between breast tumor patients with emotional inhibition and those with emotional expression. *Psychiatry and Clinical Neuroscience*, 57, 289-294.
- ⑤ Kennedy-Moore, E., and Watson, J. C. (2001). How and when does emotional expression help?. *Review of General Psychology*, 5(3), 187-212.
- ⑥ McDonald, S. A., & Hardy, C. J. (1990) Affective response patterns of the injured athlete. *The Sport Psychologist*, 4, 261-274.
- ⑦ Stanton, A. L., Danoff-Burg, S., Cameron, C. L., Bishop, M., Collins, C. A., Kirk, S. B., Sworowski, L. A., & Twillman, R. (2000). Emotionally expressive coping predicts psychological and physical adjustment to breast cancer. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 68, 875-882.
- ⑧ 辰巳智則・中込四郎. (1999). スポーツ選手における怪我の心理的受容に関する研究：アスレチック・リハビリテーション行動の観点からみた分析. *スポーツ心理学研究*, 26, 47-53.
- ⑨ Tatsumi, T. (2013). Development of Athletic Injury Psychological Acceptance Scale. *Journal of Physical Therapy Science*, 25, 545-552.
- ⑩ Tatsumi, T. (2014). Relationship between Adaptation after Returning to Competition and Psycho-Behavioral Attitudes during Injury Rehabilitation. *Journal of Physical Therapy Science*, 26, 1813-1823.
- ⑪ Tatsumi, T., & Takenouchi, T. (2014). Causal Relationships between the

Psychological Acceptance Process of Athletic Injury and Athletic Rehabilitation Behavior. *Journal of Physical Therapy Science*, 26, 1247-1257.

- ⑫ Tatsumi, T., Fukumoto, T., & Bai, D. (2015). Psychological adjustment to athletic injuries, *Bulletin of Kio University*, 12(3), 19-26.
- ⑬ Tatsumi, T., & Takenouchi, T. (2017). Correlations between emotion regulation behaviors and processes of accepting sports injuries: from the perspective of enacted social support. *Psychology*, 8, 1091-1109.
- ⑭ Tatsumi, T., & Takenouchi, T. (2019, July). *Qualitative study of correlations among social support, emotion regulation behaviors, and acceptance of sports injuries*, Poster session presented at 15th European Congress of Sport Psychology, Münster, Germany.
- ⑮ 辰巳智則 (2019) . 負傷競技者のスポーツ傷害受容に関する研究. 名古屋大学教育発達科学研究科博士論文, 1-171.
- ⑯ 上向貫志・竹之内隆志 (1997). スポーツ障害の受容に関する事例研究. *総合保健体育科学*, 20, 99-106.
- ⑰ Wright, B. A. (1960). *Physical disability: A psychological approach*. New York: Harper & Row Publishers, 106-137.

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 Tatsumi, T., & Takenouchi, T.	4. 巻 8
2. 論文標題 Correlations between emotion regulation behaviors and processes of accepting sports injuries: from the perspective of enacted social support	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Psychology	6. 最初と最後の頁 1091-1109
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4236/psych.2017.88071	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Tatsumi, T.	4. 巻 8
2. 論文標題 Constructing the athletic injury social support scale	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Proceedings of 8th International Scientific Conference on Kinesiology	6. 最初と最後の頁 577
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Tatsumi, T., & Takenouchi, T.	4. 巻 23
2. 論文標題 Received social support, emotion regulation, and process of psychologically accepting injuries [Abstract]	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 International Journal of Behavioral Medicine	6. 最初と最後の頁 109
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Tatsumi, T., & Takenouchi, T.	4. 巻 51
2. 論文標題 A review of theoretical models of psychological adjustment to athletic injuries [Abstract]	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 International Journal of Psychology	6. 最初と最後の頁 1115
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 5件）

1. 発表者名 Tomonori Tatsumi, Takashi Takenouchi
2. 発表標題 Qualitative study of correlations among social support, emotion regulation behaviors, and acceptance of sports injuries
3. 学会等名 15th European Congress of Sport Psychology (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Tatsumi, T.
2. 発表標題 Development of athletic injury emotion regulation behavior scale
3. 学会等名 14th International Society of Sport Psychology World Congress (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Tatsumi, T.
2. 発表標題 Constructing the athletic injury social support scale
3. 学会等名 8th International Scientific Conference on Kinesiology (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Tatsumi, T., & Takenouchi, T.
2. 発表標題 Received social support, emotion regulation, and process of psychologically accepting injuries
3. 学会等名 14th International Congress of Behavioral Medicine (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Tatsumi, T., & Takenouchi, T.
2. 発表標題 A review of theoretical models of psychological adjustment to athletic injuries
3. 学会等名 31st International Congress of Psychology (国際学会)
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	竹之内 隆志  (TAKENOUCHI Takashi)	名古屋大学	
研究協力者	福本 貴彦  (FUKUMOTO Takahiko)	畿央大学	
研究協力者	細越 寛樹  (HOSOGOSHI Hiroki)	関西大学	
研究協力者	鈴木 敦  (SUZUKI Atsushi)	東京医科歯科大学	